

## 地域情報（県別）

### 【東京】「地域活動はおまけじゃない」若手医師主動のイベントが半年で100人規模に-梅沢義貴・同善病院医師に聞く◆Vol.3

2023年3月31日(金)配信 m3.com地域版

医療やケアをワンストップで提供する「コミュニティ・ホスピタル」を目指す同善病院（台東区）は、地域活動にも力を入れている。「医療機関ではおまけになりやすいが、当院では重要な柱の一つ」。以前から地域活動に関心があった梅沢義貴医師は加入してすぐにイベント「あおぞらカフェ」を開催。SNS運用の効果もあってこのイベントは半年後、100人が集まる規模に成長した。病院が地域交流を進める過程をたどった。（2023年2月2日インタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら



梅沢義貴氏（左）など同善病院の医師たち

——梅沢先生は窪田先生（Vol.2を参照）と同様、藤田医科大学が行う総合診療プログラム（藤田総診）の一環で勤務しているのでしょうか。

そうです。私は窪田と同じく医師5年目、総合診療科専攻医3年目です。2018年に順天堂大学医学部を卒業後、同学部附属練馬病院で初期研修を受け、2020年に藤田総診に入りました。プログラムの一環で豊田地域医療センターで働くなか、同センター副院長の大杉泰弘先生から同善病院のコミュニティ・ホスピタル化構想を聞き、「ぜひ」と参加した次第です。当院の小笠原副院長と同様、2022年4月に加入しました。

——総合診療を学びに東京から愛知に行き、またこちらに戻ってきたと。

「地域医療ってカッコいいな」と思ったんです。研修医2年目のころ、1カ月間の地域研修として島田総合病院（千葉県銚子市）に勤務しました。このときに初めて外来・病棟・在宅医療を全て担い、患者さんの退院後もその人を診られることに魅力を感じました。

初期研修先は急性期病院であり、終末期の患者さんを担当することもありましたが退院後はフォローできません。「この人はこれからどうなっていくのだろう」ともやもやした気持ちを抱きましたが、地域研修を経て、「外来から在宅までを担う働き方であれば……」と可能性を感じました。

これまでの経験から、患者さんの中には同じ医師に診てもらいたいと思う人が多いと感じています。もちろん、医師に幅広い知識と技術があってこそですが、患者さんを長く診ることでその人に安心感を提供できるのであればカッコいいな、と。

——梅沢先生は現在、同善病院で外来・病棟・在宅を担当しつつ、地域活動を主動しているそうですね。

私には医師の仕事とは別に、50歳までにカフェか花屋を開きたい夢があります。そのため、以前から地域交流にとっても興味があり、同善病院が地域活動にも力を入れていくことを知って「やりたい」と志願しました。

医療機関が行う地域活動は診療などより優先順位が低いもの、いわゆる「おまけ」になりやすいように思いますが、「地域に愛される」をコンセプトしている当院では「外来」「入院」「在宅医療」と同じ柱の一つに据えています。

#### ——2022年4月の加入からどんなことを行ってきたのですか。

1カ月後の5月に、同善会クリニックの駐車場で「あおぞらカフェ」というイベントを開きました。病院やクリニックの中ではどうしても病気の話がメインになりますが、診療という制限なしに、患者さんやご家族、地域の人に日々の困りごとや地域のことをいろいろとお聞きしたかったのです。外来で案内したほか、SNSのInstagramで病院のアカウントを開設して告知しました。結果、土曜日午後の2～3時間で20～30人ほどが来てくれました。



梅沢氏が企画した「あおぞらカフェ」の第1回（本人提供）

#### ——動きが早いと思いました。Instagramは周知に有効だったのでしょうか。

有効でした。参加者の多くは患者さんやその友人でしたが、ユニークな活動をしている人ともインスタ経由で出会えました。「高齢者でも食べやすい優しいパン」をコンセプトにパン屋を経営している歯科の先生から、「良い取り組みなので参加したい」と連絡があったのです。「地域の面白い人」という点では、以前に知り合った薬剤師にも参加してもらいました。この方は町中で屋台を引きながら住民の健康相談に乗る活動をしており、イベントでは会場で薬膳茶も提供してくれました。

インスタは平時のつながりづくりでも生きています。在宅医療の関係者などとの交流が生まれており、訪問看護ステーションのスタッフと出会って患者さんを紹介して下さったこともあります。

#### ——SNS運用が効果を出しているのですね。あおぞらカフェは定期開催していく意向ですか。

はい。季節ごとに1回は開きたい考えです。2022年の夏は子ども向けに屋台を出したかったのですが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）第7波の影響でできず、代わりに自由研究の題材になればと「どうぜん探検隊」と称してオンラインで院内ツアーを行いました。

11月に開いたあおぞらカフェの第2回では、地域のさまざまな人と親交があるコミュニティ・ナースが協力してくれたこともあり、100人ほどが来てくれました。ケアマネジャーや訪問看護ステーションのスタッフなど来場者の幅が広がり、イベントも増えました。認知症患者の視界をAR（拡張現実）で体験できる催しを開いたり、外来患者さんの希望を受けて私が帯状疱疹ワクチンに関するお話をしたりしました。

#### ——地域活動における今後の展望をお聞かせください。

あおぞらカフェの定期開催に加え、小学校や中学校で出張授業を行いたいと考えています。同善会はもともと、子どもへの教育事業からスタートしました（詳細はVol.1を参照）。地域の高齢の人の中にはこういった歴史を知っている人がいますが、子育て世代の認知度はあまり高くありません。原点回帰といえますか、地域の子どもやその親御さんに病院のことを知ってもらう機会をもっとつくりたいですね。そしてゆくゆくは、地域の全世代に当院を知ってもらうことが今の願いです。

同時に、法人内の気運を高めていくことも重要です。私たちがコミュニティ・ホスピタル化に向けた活動を始めてからまだ1年未滿。職員の中には私たちの活動や思いを十分に知らない人もいると思うので、外だけでなく組織内部にも意識を向け、一体感をもって活動を展開できるようにしていきたいです。

◆梅沢 義貴（うめざわ・よしき）氏

2018年順天堂大学医学部卒。同学部附属練馬病院での初期研修後、2020年に藤田医科大学の総合診療プログラムに加入。2022年4月から同善病院に勤務し、在宅医療センター開設に携わる。外来・病棟・在宅の3部門を担うほか、地域活動も主動する。病棟部門長。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

